

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

ハマゴウ (*Vitex rotundifolia* L.fl.)

澤田佳宏 (兵庫県立大学/兵庫県立淡路景観園芸学校) yoshihiro_sawada@awaji.ac.jp



ハマゴウはクマツヅラ科の落葉小低木で、砂質または礫質の海岸に生える海浜植物である。直立する幹はなく、かわりに地下茎または地上匍匐茎が水平に伸び、これらから枝が垂直に立ち上がる。枝の高さは 30~100cm 程度と低く、木本でありながら多年草のような形態となる。夏、海水浴場が賑わう頃、枝先に青紫色の美しい花を着ける。葉や果実にはハーブのようなさわやかで強い芳香があり、この香りのために果実を枕の詰め物に用いることがある。結実は主に秋で、果実 1 個に 1~4 個の種子が含まれる。果実は長期間海水に浮くことができ、海流散布で離れた海浜に到達できる。国内では本州・四国・九州・琉球・小笠原、国外では中国・朝鮮・東南アジア・ポリネシア・オーストラリアに分布する^{1) 2) 3)}。

海浜の環境は、汀線に近い場所では砂の移動や飛塩などが激しく、陸側へ向かって徐々に穏やかになる。この環境傾度に応じて、海浜植生は汀線に平行な帯状構造をつくる。たとえば、本州太平洋側や九州の幅の広い海浜では、汀線付近から陸側へ向かって、不安定帯のコウボウムギ群落、半安定帯のケカモノハシ群落、安定帯のチガヤ群落やハマゴウ群落を経て、マサキやトベラなどの海岸低木林やクロマツ植林へと配列する⁵⁾。ハマゴウは草本群落と樹林の間のやや穏やかな立地を好む。近年、海浜では背後に防潮堤が設置されて海浜幅が狭められる例が多いが、防潮堤の前面は風が弱められて適度に穏やかな環境となり、ハマゴウ群落がよくみられる。

ハマゴウ群落は、(その他の海浜植生と同様に) 飛砂を防ぐ働きがあるため、海岸砂防上有益である。また、海浜の生物群集を支える基盤ともなる。したがって、ハマゴウ群落等の海浜植生が成立している場合は、これを保全して活用すべきである。また、防波堤工事等で海浜植生を破壊した場合や、

人工海浜をあらたに造成した場合は、ハマゴウ群落をはじめとする海浜植生の修復や再生が望まれる。その際、まずはモニタリング調査によって自然回復の程度を把握し、必要不可欠な場合のみ種の導入を行うのがよい。

ハマゴウの導入は播種によっても株移植によっても可能である。ただし、実生発芽では初期の成長が遅いため(写真-1 右)、近隣のつぶれ地から株を得られるならば、播種よりも株や地下茎の移植をおこなう方が早く植被が得られる。播種による場合、秋に播けば、翌年の 5~6 月に大半が発芽する⁴⁾。株移植による場合は、冬季に枝および根の着いた地下茎を 50cm 程度の長さに切り分け、乾燥を防ぐためにバケツの水に浸して運搬して植え付けると、問題なく活着する。また、根や枝のない地下茎断片からも再生する。防波堤工事で植生が破壊された現場では、重機によって断裂された地下茎から発芽している個体をしばしば見かける。このような個体を掘り出してみると、地下茎は地表面下 10cm 程度に埋もれている(写真-1 左)。したがって、工事の際に地下茎断片を地表面下 10cm 程度の深さで埋めれば、そこからの植生回復が期待できそうである。

ハマゴウを導入するときは、当然のことながら遺伝子の多様性への配慮が必要である。ただし、ハマゴウの遺伝子多様性の地域構造はいまのところ明らかにされていないため、当該海域の潮流などを考慮しつつ、できるだけ近傍の海浜から材料を得るようにしたい。兵庫県の事例では、尼崎市の人工海浜にハマゴウを導入するにあたり、大阪湾沿岸で採集された種子以外は用いないこととしている。

引用文献

- 1) 奥田重俊編 (1997) 日本野生植物館, 小学館, 631 pp.
- 2) 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫 (1989) 日本の野生植物 木本 II, 平凡社, 305 pp.
- 3) 澤田佳宏・津田智 (2005) 日本の暖温帯に生育する海浜植物 14 種の海流散布の可能性, 植生学会誌, 22 : 53-61.
- 4) 澤田佳宏・津田智 (2005) 日本の暖温帯に生育する海浜植物 14 種の永続的シードバンク形成の可能性, 植生学会誌, 22 : 135-146.
- 5) 矢野悟道・波田善夫・竹中則夫・大川徹 (1983) 日本の植生図鑑 II 人里・草原, 保育社, 200 pp.



写真-1 2011年12月の工事からの回復。